【佳作】

『道成寺縁起』絵巻を探求

― 清姫はなぜ蛇になったのか ―

国際日本学部　歴史民俗学科４年
岡部 恵海

序章

安珍清姫伝説は『大日本法華験記』をはじめとする、様々な書物に見られる物語である。その中でも、詞書だけでなく絵巻として、安珍と清姫の姿を描いているのは『道成寺縁起』絵巻である。『道成寺縁起』絵巻は、室町時代後期の絵巻で、作者不詳である。のちに江戸時代にも多く絵巻に描かれており、作品は多数存在する。しかし、多数の絵巻が存在しても室町時代後期に描かれた絵巻との物語の展開に大きな変化はない。

『道成寺縁起』絵巻で話の軸となるのは、清姫の蛇への変化である。男を追いながら徐々に蛇と成っていく女の姿は、印象的なシーンである。しかし、誰もが清姫のように蛇に変化するわけではない。清姫はなぜ蛇へと変化したのかを、変化するための要素としてあげられるもの、そしてその要素がなぜ関連していくのかを明らかにしていこうと思う。

安珍清姫伝説の史料は様々で、史料それぞれ登場人物の呼称も異なる。『道成寺縁起』絵巻では僧と女房とされており、本来、安珍清姫の二人の名が見られるのは近世の浄瑠璃以降の事である。だが、様々な史料と比較するため、ここでは僧を安珍、女房を清姫と統一する。

【あらすじ】

醍醐天皇の御世、延長六年（929）、奥州より大変な美形の若い僧が熊野に参詣に来た。紀伊国牟婁郡（現在の和歌山県）真砂（まなご、まさご）で宿を借りた若い僧は、亭主清次庄司の嫁に一目惚れされ、女だてらに夜這いをかけて迫られる。若い僧は僧の身ゆえに当惑し、必ず帰りには立ち寄ると口約束だけをしてそのまま去った。

欺かれたと知った女は怒って追跡をはじめるが、若い僧は神仏（熊野権現・観音）を念じて逃げのびる。若い僧は日高川を渡るが、女も河川に身を投じて追いかける。蛇体となりかわり日高川を泳ぎ渡った女は、日高郡の道成寺に逃げ込んだ若い僧に迫る。梵鐘を下ろしてもらいその中に逃げ込む若い僧。しかし女は許さず鐘に巻き付く。哀れ若い僧は鐘の中で焼き殺されてしまうのであった。若い僧を滅ぼした後、本望を遂げた女はもとの方へ帰っていった。

畜生道に落ち蛇に転生した二人はその後、道成寺の住持のもとに現れて供養を頼む。住持の唱える法華経の功徳により二人は成仏し、忉利天と都率天に生まれ変わり、天人の姿で住持の夢に現れたのである。[i]

1章　物語に登場する中世の蛇

1章1節　変化する蛇の持つ意味

蛇は説話に多く登場し語られてきた。仏教説話集の中で登場する蛇の多くは、女の恋心からくる嫉妬の悪念として表現される。女が蛇に変化することは、仏教説話において女人罪障・邪淫・多情・妬毒の戒め、そして念仏の救済などの宗教テーマを話の根幹にしている。このような女が蛇と成ることを、堤邦彦は「女人蛇体」としてまとめている。中世の仏教説話や江戸の勧化本の世界にあり、教義、経典の具体化、説話化において見られる。女が蛇になった理由を、天性の嫉妬深さに求め、悪女としての像

をつくり、それを説教する僧という物語の構成が説話のステレオタイプとなった。恋ゆえに憎しみの淵に沈む女の蛇体変身は、仏教説話において、代表的な蛇のイメージに影響を与えたと言えると、堤邦彦は述べている（堤邦彦．2006）。

さらに堤邦彦は『女人蛇体―偏愛の江戸怪談史―』で女人蛇体の説話の変遷を次のように分類している（堤邦彦．2006）。

①古代アニミズムの神話体系を原郷とする水の精霊の民談

昔話・伝説・山川沼沢の由来・起源のかたちで、自然の神々と人々のかかわりを語った説話群といえる。

②宗教説話群

中世社会にわきおこった仏教唱導の隆盛を背景に自然神の仏法への帰順を語る。

いわゆる「神人化度」の呼称を与えられたこれらの仏教説話は、多くの場合、土着の水精（竜女）を救済した各宗高僧のたぐいまれな法力を話の中心点とし、教化をうけた風土神が報謝のあかしに土地を差し出し、沼沢を埋めて寺堂が建てられるといった「開創縁起」の形式をとる。

③怪異譚

二様の蛇婦伝承の古層をふまえ、江戸期の小説、芝居、浮世絵などの表現文化のなかに、恋の懊悩や嫉妬に狂う執着のこころねを因として蛇身に変化する女たち。虚構の物語空間を飾ることになる。

①の蛇についてのイメージは南方熊楠が生態の視点から論じている。南方熊楠によると、蛇は水辺を好み、四肢がないにも関わらず泳ぐことができる。このことは蛇が水の神であることの由来となったと考えられる。また、蛇の脱皮という行為は、変身や新生、浄化、さらには転生と不死を連想させ、信仰の対象となった。特に、中国の蛇信仰は古代日本と類似的である。中国の祖先神は伏羲と女媧という人面蛇神の夫婦神であり、蛇の出現は吉兆であった。一方で、蛇は妖怪とされ、不幸・病・死をもたらすともされた。また、人間の蛇への変身、蛇の人間への変身が信じられていた（南方熊楠．1971）。蛇の生態から人々は、水との関り、さらには生死、変身というイメージをもっていた。

②の宗教説話群から③の怪談譚については、蛇と女のイメージが仏教の経典を出所に持つことを指摘しておかねばならない。室町期に成立し、寛文九年（1669）の刊本のある、存覚著『女人往生聞書』は、近世でも著名な唱導書のひとつである。そこでは諸仏典から次のような女人の業障を列挙している[ii]。

清風無色猶可捉、蚖蛇含毒猶可触、執剣向敵猶可勝、女賊害人難可禁。

（清風の色無きをなお捉りつべし。蚖蛇の毒を含めるをなお触れつべし。剣をとりて向える敵にはなお勝てぬべし。女賊の人を害するは禁ずべきこと難しとなり）　『智度論』[iii]

仏典では、仏教での女の罪深さを蛇に例えている[iv]。ただし、仏典には女人差別の表現はあるが、嫉妬という語もそれを示唆する表現も見当たらず、仏典では蛇と嫉妬は結びつかない。

だが、次の『女人往生章』[v]「十悪」第二には、女の嫉妬に対して蛇が比喩として使われている。

「二ツには、嫉妬の心、毒蛇のごとく、もしその家に異女ありて、容顔をのれにすぐれたれば、かならず憎嫉をいだき、口にはあひしたしむにたれども、心は怨家のごとし。もしかの女、そのが夫と通ずとしれば、嗔恚の炎むねをこがして、或は人をやといて殺害し、或は讒奏罵辱し、方便を以、他をのぞき、われひとり立ん事を思ふ。」

（嫉妬心は毒蛇のようで、もしその家に別な女がおり、自分より顔立ちが良ければ、かならず強く憎み、口では親しそうにふるまっても心では讐敵とみなし、もしその女が夫と通じたりしたら、人を雇ってその女を殺したり…）

「嫉妬心、毒蛇のごとく」とあるように、女の嫉妬心を蛇に比喩している。

そして、『女人往生章』「十悪」第二の女の嫉妬心を蛇に例えて絵に表現して描いたものとして代表的であるのは、『熊野観心十界曼陀羅』に描かれている両婦地獄の蛇女である（図1）。両婦地獄には、頭

図１『熊野観心十界曼陀羅』「両婦地獄」
兵庫県立歴史博物館HP（2023年１月17日閲覧）

が人の女で体が蛇である者が二匹、一人の男に巻き付いている。『熊野観心十界曼陀羅』は中世末期から江戸時代にかけて絵解きで使用されたと推測されたものであるが、蛇と女の関係が深いことを表している史料の一つであることが分かる。

仏典では、女の罪は蛇に例えられた。それが説話の中では、女の嫉妬の心を蛇に例えている。仏教における女の強い愛情は罪として、嫉妬心を蛇に比喩して表現したことから仏教の蛇のイメージには、女の強い嫉妬心の表現があったと言える。

1章2節　中世の蛇のイメージ

『道成寺縁起』絵巻が描かれたのは中世であるとされるため、①と②に述べられているように、古代の自然神とのかかわりを古層に持ち、土着の神を救済する高僧の教化として説話で語られるようになった時期と重なる。また、小峯和明も蛇のイメージの変遷を、「蛇は日本古来の神道思想に基づき、水を司る「神」もしくは「神の化身」で崇められてきた動物である。しかし、仏教の影響を大きく受けた『今昔物語集』[vi]においては、蛇は畏れ敬う神ではなく、忌まわしい動物であり、罪障深い畜生、悪行煩悩の象徴としてとらえる傾向が、はっきりとみてとれる。」[vii]と述べており、門池真菜もまた、「仏教の影響により、忌まわしい動物となり執着や復讐のといったイメージが多くみられるようになったが、一方で蛇を神とする神道的思想も消滅せず残り続けた。」[viii]と述べている。

これらをふまえると、中世の蛇のイメージは、水の精霊と生死との関りを古層に、仏教の影響によって説話の中で、高僧の法力による救済される悪念、特に女の嫉妬心、広くは恋愛における男への憎しみを表すシンボルとなった。また、そうした流れは中世の仏教説話では、土着の神々が荒れ狂い人々を苦しめるが、それを高僧が救済するという物語の軸が多くみられるようになった。その影響を受けて描かれたのが『道成寺縁起』絵巻である。

2章　『道成寺縁起』絵巻から読み解く

2章1節　生きながら蛇になる

『道成寺縁起』絵巻の物語の起源は『大日本法華験記』[ix]巻下「紀伊國牟婁郡悪女」に見える。物語の内容はほぼ同じと言って良いが、注目すべきは清姫が蛇になるシーンである。

以下、女が道行く人に安珍の行方を尋ね、欺かれたと知った後の描写である。

> 家に還りて隔る舎に入り、籠居して音なかりき。即ち五尋の大きなる毒蛇の身と成りて、この僧を追ひ行けり。　（『大日本法華験記』）
>
> 「況や、蛇となれるを見つつ、声も惜しまず喚きいく。」「其の時、衣を脱ぎ捨て、大毒蛇と成りて、此の河をば渡りにけり。」
>
> （『道成寺縁起』絵巻）

『大日本法華験記』で清姫は、部屋に籠って蛇となったのに対して、『道成寺縁起』絵巻では、走りながら蛇になっていくのである（図2・3）。『道成寺縁起』絵巻の見どころともなるシーンである。ではどうして、物語の起源である『大日本法華験記』のように「部屋に籠ってから蛇になる」のではなく、「走りながら蛇になる」描写に変化したのだろうか。

そこにはもちろん絵巻物になるうえで、見どころになるシーンになるための変化とも受け取れる。だが、ここには女が変化することへイメージの変化も影響していると考える。古代神話体系における蛇は、水と深い関係をもつ生死にかかわる存在であり、

仏教における蛇は、女の嫉妬心・憎しみを表現するシンボル的存在であった。『大日本法華験記』が仏教的要素を強く含んでいるのであれば、『道成寺縁起』絵巻は土着信仰の要素を強くはらんでいると考えた。『大日本法華験記』は部屋に籠って蛇になり、『道成寺縁起』絵巻では、川に飛び込み蛇になる（図4）。

『大日本法華験記』には、「籠居して音なかりき。」としかないが、『今昔物語集』[x]巻14第3「紀伊国道成寺ノ僧法華ヲ写シ蛇ヲ救フ話」には、次のように書かれている。

家に返て寝屋に籠り居ぬ。音せずして、暫く有て、即ち死ぬ。家の従女等、此れを見て、泣き悲む程に、五尋許の毒蛇、忽に寝屋より出ぬ。

（『今昔物語集』）

『今昔物語集』でははっきりと死してから蛇になったことが分かる。対して『道成寺縁起』絵巻は、「切り目川」を渡り、「切目五体王子」で安珍に追いついた清姫は、上半身から徐々に蛇と成りながら追いかける（図2・3）。そして、「日高川」に飛び込んだのち、完全な蛇と成って安珍を追いかけていく（図4）。変化の起点が部屋であったのに対して、川であるこ

図2　『桑実寺縁起　道成寺縁起』80・81頁　清姫は蛇になりつつ安珍を追う

図3　『桑実寺縁起　道成寺縁起』82・83頁　上半身が蛇になった清姫

図4　『桑実寺縁起　道成寺縁起』86・87頁　清姫は日高川に飛び込み完全な蛇となる

とが分かる。『大日本法華験記』、『今昔物語集』は、部屋に籠って死んだと言えるし、『道成寺縁起』絵巻は川に飛び込んで死んだと言えるだろう。

だが、『大日本法華験記』や『今昔物語集』では、蛇となるには死んで怨霊となる必要があったが、『道成寺縁起』絵巻は、死ぬ前から蛇となりつつあった。これには、水と蛇の関りが蛇変化の要素として加わったと考えられる。

完全な蛇にはならずとも、安珍の裏切りによる清姫の憎しみは強いことは絵巻からもうかがえる。

①清姫が安珍の裏切りに気づいた時

「あな口惜しや。さては、賺しにけり」「縦へ、雲の終わり、霞の際までも、玉の緒の絶えざらむ限りは尋ねむ物を」　(p.190)

「あなあな口惜しや。一度でも、我此の法師めを取り詰めざらん限りは心は行くまじき物を。能き程の時こそ、恥も何も悲しけれ。裏無しも、表無しも、失せふ（→む）方へ失せよ」　(p.190)

②安珍を追いかける

「あなあな口惜しや。如何はせむ、如何はせむ。この身をば、ここにて早捨て果てて命を思ひ切り目河、嘆きの涙深ければ、浮き名を流すとても、力無き事かな」　(p.191)

③安珍に追いつき問いかけたが「人違いだ」と言われた時

「己れはどこまで、どこまで遣るまじき物を」　(p.191)

安珍が約束を裏切ったことに気づいた清姫は安珍を追うことを決意し、走り始める。清姫は安珍を追いながら切り目川を渡る。その際、「この身をば、ここにて早捨て果てて命を思ひ切り目河、嘆きの涙深ければ、浮き名を流すとても、力無き事かな」と、清姫は川を渡りながら自らの悲しみの深さを表現している。切り目川を渡った際、清姫は水の呪力に触れている（図5）。その後、安珍に追いつき問いかけるも、「人違いだ」と安珍に言われると「己れはどこまで、どこまで遣るまじき物を」と清姫は蛇に変化しながら追いかけ続けるのである（図2・3）。清姫は安珍の裏切りに気づいても本人に会えるまで想い続けたにもかかわらず、挙句の果てには「人違いだ」と言われた事への憎しみは、さぞ深いものだっただろう。走りながら、水の呪力に触れたこと、安珍に再会し清姫の憎しみは頂点に達したことは、清姫が生きながら蛇になることを可能にした。

また、生きながら蛇になる物語の展開は、今日にも能楽で登場する能面の「生成」[xi]「般若（中成）」[xii]「真蛇（本成）」[xiii]と関係していると考える。絵巻の展開は、のちに能楽の「生成」「般若（中成）」「真蛇（本成）」の演技法に影響をしている、物語の新しい展開の起点となったと考えられる。絵巻に描かれた、走りながら安珍を追う清姫が徐々に蛇へと変化する姿は、見る人を魅了したことだろう。清姫の憎しみの表現方法として、死ぬ前の不完全な状態から蛇と成っていく表現が行われたのではないだろうか。これにより、生きたまま蛇になるという展開が物語の見どころとして広く浸透したと考える。

足首までつかりながら「切目川」を渡った時（図5）に触れた少しの水の呪力は、安珍に二度も裏切られた憎しみによって生きながらも清姫を蛇にした。その後、「日高川」で死んだ清姫は完全に蛇となっ

図5　『桑実寺縁起　道成寺縁起』76・77頁　切り目川を渡る清姫

た（図4）という流れが完成する。『道成寺縁起』絵巻の物語の展開には、水の呪力と清姫の憎しみが徐々に高まっていく様子を「生成」「般若（中成）」「真蛇（本成）」という今日まで続く、物語の展開を組み込み表現されたのではないだろうか。

女が蛇になるには、死ぬことが一つ要素としてあげることができ、また、生きながら蛇になるには、水の呪力と強い憎しみを持っている事が要素としてあげることができる。

『道成寺縁起』絵巻は蛇への変身に、『大日本法華験記』や『今昔物語集』にはなかった水の呪力という要素が加わったと考えられる。

2章2節　『道成寺縁起』絵巻と「橋姫伝説」の比較

次の例に、「橋姫伝説」を取り上げたい。橋姫については、『平家物語』[xiv]の読み本系異本の『源平盛衰記』・『屋代本』などに収録されている「剣巻」に次のように記載されている。

> 嵯峨天皇の御宇に、或る公卿の娘、余りに嫉妬深うして、貴船の社に詣でて七日籠りて申す様、「帰命頂礼貴船大明神、願はくは七日籠もりたる験には、我を生きながら鬼神に成してたび給へ。妬しと思ひつる女取り殺さん」とぞ祈りける。明神、哀れとや覚しけん、「誠に申す所不便なり。実に鬼になりたくば、姿を改めて宇治の河瀬に行きて三七日漬れ」と示現あり。女房悦びて都に帰り、人なき処にたて籠りて、長なる髪をば五つに分け五つの角にぞ造りける。顔には朱を指し、身には丹を塗り、鉄輪を戴きて三つの足には松を燃やし、続松を拵へて両方に火を付けて口にくはへ、夜更け人定りて後、大和大路へ走り出で、南を指して行きければ、頭より五つの火燃え上り、眉太く、鉄漿黒（かねぐろ）にて、面赤く身も赤ければ、さながら鬼形に異ならずこれを見る人肝魂を失ひ、倒れ臥し、死なずといふ事なかりけり。斯の如くして宇治の河瀬に行きて、三七日漬りければ、貴船の社の計らひにて、生きながら鬼となりぬ。宇治の橋姫とはこれなるべし。[xv]

橋姫は、深い嫉妬心から自ら鬼になることを望み、貴船大明神のお告げを実行したことで、生きながら鬼になったのである。

嫉妬心を抱き、川に浸かり鬼に変化している。要素として『道成寺縁起』絵巻の清姫の変化と類似している。また、橋姫が夜更けに宇治川へ向かう際、「大和大路へ走り出で」と、走り向かうところも、『道成寺縁起』絵巻の清姫と類似している。

ただし、走る橋姫と清姫には違いがある。目的が河であるか、男を追う事かの違いである。

清姫が安珍を追うシーンだが、男が女との約束を破り怒った女に追いかけられるという展開は、神話であるイザナギが黄泉の国にいるイザナキに会いに行くシーンと類似している。約束を破ったことから始まるイザナミによるイザナキの逃走劇は、約束を破られたことに怒った清姫が安珍を追うシーンと同じ展開である。どちらも、約束の破棄による逃走劇である。約束の破棄により、貞淑な女性が怒りから鬼女と成る展開は劇的なリズム感をもち、見る人を魅了したことだろう。この逃げ隠れる話の展開は、世界的にも逃竄譚として多くの話に見られる。

ここまで、清姫が蛇に変化するシーンを様々な要素から読み解いたが、『道成寺縁起』絵巻で見逃せないことは、やはり物語が風土化したことである。清姫が変化する要素として、「死」、「水」、「憎しみ」、「逃走と追跡」の四つをあげることができるが、いずれも古代神話体系の蛇と仏教の蛇のイメージの影響は大きい。だが、『道成寺縁起』絵巻の場合は、庶民生活の中にある思想とその土地とが結びついた表現がされている。特に、「切り目川」、「切り目五体王子」（図6）、「日高川」（図7）という実際の地名が絵巻には書かれている。

清姫の憎しみを絵巻に描くとき、見どころになるシーンとして、「水」と「変化」を組み合わせ、「変化」の場所を日高川（水）という地域性を取り入れた。また、女の怒りを追う女の異様な姿に表現することで、執着と怒りの高まりを見事に表現しているのである。

図６ 『桑実寺縁起　道成寺縁起』79頁　切目五体王子

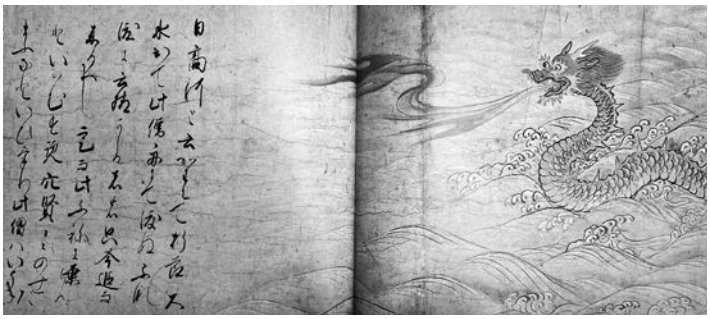

図７ 『桑実寺縁起　道成寺縁起』88・89頁　日高川

２章３節　『道成寺縁起』絵巻と「比良八荒の女」の比較

『道成寺縁起』絵巻のほかに、女人蛇体の物語が地域に根づいた例として、似ている伝説が近世期の琵琶湖周辺の民俗社会に「比良八荒の女」として語り継がれている。

> 女の人がお坊さんに恋をしはったんやねん。恋をした女の人が、盥の舟に乗って、お坊さんのところに通わはったんやな。お坊さんがな、あんまり来るさかいかなわんけ、今夜は、燈台の灯を消しとこうと言って消さはったんやな。そうしたところが、燈台の灯を目当てに来るのに、今日は燈台の灯がないと言うので、盥が引っくり返って死なはったんやな。「比良八荒、蛇で渡る」と言って、死なはって蛇になって、燈台に向いて渡らはったんやて。女の一念は恐ろしいて。それから比良の八荒と言うて三月二十八日頃に、三日間お祭りがあるんですねん。その間中、琵琶湖が荒れ狂うて言う、言い伝えがあるんですねん。死なはった女の人が湖を荒れさしたりささはると言いますのや。比良さんの祭りが終わると、春の良いお天気が来ると言う、昔からの言い伝えですがな。[xvi]
>
> （『日本伝説大系』巻七所収・西浅井町の採話例）

お坊さんに恋をした女の執念が水の呪力に触れて蛇になった話である。『道成寺縁起』絵巻の物語と類似している。「比良八荒の女」は、『道成寺縁起』絵巻のより後に語り継がれた民話であり、『道成寺縁起』絵巻の影響を受けた物語で、『道成寺縁起』絵巻と系統を同じくする物語である。また、『道成寺縁起』絵巻が後世の物語へどのような影響を与えたのかが分かる史料である。蛇に変化するには、激しい「憎しみ」の心を持ちながら「死」ぬことであった中に、「水」の呪力という要素を加えたのが、『道成寺縁起』絵巻の特徴であった。「比良八荒の女」は、これら要素を含んでいる。比良八荒は、琵琶湖周辺を吹き荒れる季節風である。「比良八荒の女」もまた、女人蛇体の物語が地域に根づいた例と言うことができ、実際に現在まで比良八講[xvii]として信仰されている。

また、『道成寺縁起』絵巻と「比良八荒の女」からは「水」という要素に、変化の呪力だけでなく、河が男と女の悲恋の境界を表す隠喩となっていることも考えられる。河が隔てる二人の悲恋もまた、多くの物語で語られている。「水」は二人の関係を隔て、物語が悲恋であることも表しているのではないだろうか。『道成寺縁起』絵巻の「水」は変化に必要な呪力だけでなく、結ばれない男女の境界を隠喩していたともとらえることができる。

2章4節　まとめ

死ぬ場所が河（水）となり、男を追う女の姿が協調されるようになった。その過程で、水は変化の呪力を持つことだけでなく、地域性を表すカギとなった。これにより、部屋に籠って死ぬのではなく、生きながら蛇になるという描写に変化したのではないだろうか。はだしになって走る女の姿は女の気持ちの高ぶりを表している。また、男と女の間にある河には、結ばれない男女の境界という意味が隠されているのではないだろうか。

『道成寺縁起』絵巻に描かれる物語の展開は、『大日本法華験記』に始まる安珍・清姫伝説のイメージの変化というよりは新しい要素の加わりと言える。そして、『道成寺縁起』絵巻での物語の展開はのちに様々な物語に影響を与え、今日の芸能にまで受け継がれている。

終章

安珍清姫伝説の物語の基本要素は蛇への変身である。清姫が蛇に変化する物語の展開は、主に「死」「水」「憎しみ」「逃走と追跡」という主に四つの要素が集まっていると考えられる。蛇の脱皮は変身であり、新生･再生･不死という土着のイメージを持っていた。また、蛇は水辺に生息しており水の精霊として信仰されてきた。蛇と「死」と「水」の関係は、古代神話体系のイメージからの影響と言えるだろう。そこへ仏教のイメージが追加されたことで、蛇は女の嫉妬心のシンボルとなった。嫉妬心は、つまりは憎しみといえる。人は「死」と「水」によって蛇に変化することができるが、現世で蛇として姿を現すのは、女が男を「憎んだ」のが蛇と成った理由とされるようになった。

そして、安珍清姫伝説は風土化していくことで、特定の地名が登場するようになり、絵巻として描かれる時、より人を魅了する物語の展開へと変化した。また、世界的に逃竄譚として見られる「逃走と追跡」によってリズム感のある展開となった。『大日本法華験記』の部屋に籠って蛇と成るのではなく、逃走する安珍を追いながら怒りに燃える清姫の感情の高ぶりを蛇へと変化しながら追いかける姿にすることで見事に表現しているのである。

清姫は、『大日本法華験記』を元に伝承され、また絵巻に描かれる中で、死者、水の精霊が憎しみの心を燃やす女の想いの強さを蛇へ変化させる要素として組み込まれ、伝承されてきた。この絵巻で描かれる清姫の変化は、人々の思想が反映された要素を取り入れたともいえるし、この絵巻物に組み込まれた要素が人々の思想に影響したともいえるだろう。後に江戸時代で蛇婦譚として語られていく女人蛇体の話に、安珍清姫伝説を描く『道成寺縁起』絵巻は大きな影響を与えたことだろう。

今回は触れなかったが、絵巻の清姫が蛇に変化するシーンで、なぜ水に触れた足からではなく頭から蛇へ変化したのかという課題が残った。水の呪力に触れて蛇へと変化するのであれば、水に触れた足から、という考え方が一般的であろう。しかし、描かれる半身蛇の清姫は、頭が蛇で、身体が人である。そこには、絵巻として印象付ける効果だけでなく、何か当時の思想が関係していると考えている。

絵巻物に描かれた様々な事物への概念を私なりに考察し、読み解いた。女人蛇体の物語は安珍清姫伝説にとどまらない。そのため、今後も様々な物語と比較し、考察していかなくてはならない。

参考文献

- 赤坂憲雄 『物語という回路〈叢書・史層を掘る〉Ⅱ』 新曜社　1992年4月1日
- 門池真菜 『英米文学英語学論集　巻3』「文学作品からみる蛇に対するイメージの変化―他宗教からの影響―」（P.65～100） 2014年3月20日
- 小峯和明（編）『今昔物語集を学ぶ人のために』 世界思想　2003年
- 高田衛 『女と蛇～表徴の江戸文学誌～』 筑摩書房　1999年1月10日
- 谷川健一 『蛇　不死と再生の民俗』 冨山房インターナショナル　2012年1月27日
- 堤邦彦 『女人蛇体―偏愛の江戸怪談史―』 角川学芸出版　2006年6月30日
- 浜下昌宏 『女性学評論』「「道成寺」の〈おんな〉―変容の美学」巻12p.127-148　1998年3月
- 南方熊楠 『南方熊楠全集　第一巻　十二支考』 平凡社　1971年2月20日
- 吉野裕子 『日本人の死生観』 講談社　1982年12月20日
- 訳者　福永武彦 『日本国民文学全集第一巻古事記』 1959年1月10日

一般註

『道成寺縁起』絵巻は、小松茂美編集・解説の『桑実寺縁起　道成寺縁起』（中央公論社　1982年9月）に拠る。

i 小松茂美編集・解説の『桑実寺縁起　道成寺縁起』を参考に筆者がまとめたあらすじである。

ii 以下の仏典は、高田衛『女と蛇―表徴の江戸文学誌』に掲載された存覚著『女人往生聞書』より引用。

iii 大品般若経（摩訶般若波羅蜜経）の注釈書。一〇〇巻。龍樹著と伝える。サンスクリット原典、チベット訳とも現存しないが、鳩摩羅什が後秦の弘始七年（四〇五）に一〇万頌に及ぶ原典のうち初めの三四巻を全訳し、残りは適宜抄訳したという。空の立場に立ちながら肯定的に諸法実相を説き、大乗の菩薩道を明らかにする。引用文献が多く、解説がくわしく、仏教百科の役割を兼ねる。（ジャパンナレッジ「日本国語大辞典」）

iv その他、蛇の比喩はないが、「諸有三千界男子諸煩悩、合集為一人女人之業障。（あらゆる三千界の男子のもろもろの煩悩をあわせあつめて一人の女性の業障とすなり）」（『涅槃経』）や「女人大魔王、能食一切人、現世作纏縛、後生為怨敵。（女人は大魔王なり。よく一切の人を食う。現世には纏縛をなし、後生には怨敵となるなり）」（『涅槃経』）と、諸仏典にはいずれも女人差別が見える。

v 笠原一男『女人往生思想の系譜』（1975年、吉川弘文館）に翻刻を掲載。

vi 平安後期の説話集。編者、成立年代ともに未詳。一千を越す説話から成り、天竺（てんじく）（＝インド）、震旦（しんたん）（＝中国）、本朝（＝日本）の三国の説話に分かれる。仏教説話が主であるが、本朝篇では世俗の説話が採られ、話の舞台も全国に及び、また登場人物も貴族・僧侶・武士から盗賊・乞食（こじき）に至る全階層にわたるため、当時の社会生活全般が反映されている。「今ハ昔」に始まり「トナム語リ伝ヘタルトヤ」で結ばれる形で、漢字混じり片仮名書きの漢文訓読体で書かれる。（ジャパンナレッジ「小学館 全文全訳古語辞典」より）

vii 小峯和明（編）『今昔物語集を学ぶ人のために』 世界思想　2003年。

viii 門池真菜 『英米文学英語学論集　巻３』「文学作品からみる蛇に対するイメージの変化―他宗教からの影響―」（P.65～100） 2014年。

ix 平安中期の仏教説話集。三巻。法華経の威力を実証するための、法華経信奉者の伝と霊験説話の集成。『大日本国法華経験記』ともいう。天台宗の僧鎮源が1043年（長久4）ごろに撰述した。名僧高僧の説話ばかりでなく、教団を離れて山林で修行し各地の霊場を巡歴する無名の聖の説話、庶民や動物が法華経の利益を被り、極楽や天に往生する説話も多い。聖の宗教活動の隆盛と、浄土教の浸透を反映している。説話はおおむね類型的で、文体も和習の変体漢文でつたないが、既成仏教の教義を超える新しい精神をとらえている。（ジャパンナレッジ「日本大百科全書」より）

x 校注・訳：馬淵和夫　国東文麿　稲垣泰一 『日本古典文学全集（35）』「今昔物語集（1）」（1999年、小学館）より引用。

xi 能面の一。角を少し生やし、髪を乱した女面。般若の前段階で、女性の中の魔性がまだ十分に熟さない状態を表す。「鉄輪」の後ジテに用いる。（ジャパンナレッジ「デジタル大辞泉」）

xii 能面の一。「なり」とは蛇に化生すること。生成と本成との中ほどという意。般若の面。女性の嫉妬を象徴化した鬼女の面。（ジャパンナレッジ「角川古語大辞典」）

xiii 能面の一。般若（はんにゃ）を極端に動物化したもの。（ジャパンナレッジ「角川古語大辞典」）

xiv 書名。軍記物語。流布本は十二巻。平家一門の興亡に焦点を当て、勇壮な合戦譚の中に盛者必衰の理を語る。作者、成立年代ともに未詳である。琵琶法師の語りのテキストとされ、応安四年（一三七一）の覚一検校の奥書を持つ覚一本のように十二巻の最後に灌頂巻を特立する一方系の諸本、百二十句本のように灌頂巻を特立しない八坂系の諸本があり、それぞれの流派で語りに合わせて改訂されていったのできわめて異本が多い。覚一本以前の語り本の形態はよく分らないが、屋代本が古態を示すものとされている。ほかに語りを伴わない延慶本、『源平盛衰記』などもその異本とみることができる。語りをさすときは主として平家といわれた。謡曲、その他後世

の文学、芸能に与えた影響は大きい。

[xv] 原文は『平家物語』(『平家物語剣之巻』第一軸、江戸中期）国立国会図書館デジタルコレクション（2023年1月17日閲覧）より。

[xvi]『日本伝説大系』第八巻　1984年　225頁。原典は『近江輿地志略』巻八所収の「不破拾遺」の伝承。

[xvii] 3月26日、天台系の行者たちが行う。比良山系の打見山で取水された法水を船上から琵琶湖にまき、浄水祈願がなされる。これは伝説に、比良山麓で修行中の若い僧を慕い、九十九夜通いつめたあげく思いを遂げられずに湖中に没したという娘の供養と湖で遭難した人々の供養の意味がこめられている。（大津市歴史博物館HPより　2023年1月17日閲覧）